

学校教育への「ボランティア活動」導入の課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 綿引, 伴子, 海内, 千里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/702

学校教育への「ボランティア活動」導入の課題

— ボランティア活動経験者への聞き取り調査より —

綿引 伴子・海内 千里*

Problems in Introducing “Volunteer Activities” into School Education : A Interview Survey of People Who Have Participated in “Volunteer Activities”

Tomoko WATAHIKI and Chisato KAINAI*

I はじめに—問題意識と本論構成

1995年1月に起きた阪神淡路大震災以来、日本でのボランティア活動は活発に行われるようになったが、今後ますますボランティア活動は人々の生活の中に定着していくことが予想される。ボランティア活動は、自分自身が活動の意味を実感し、社会を変革する市民としての自覚をもつことができる活動である。NPO活動とも大いに関連があり、21世紀の市民社会を考えるとときに欠かせないキーワードのひとつである。

一方、2000年12月に出された総理大臣諮問機関「教育改革国民会議」の報告で「奉仕活動の義務化」が提言された。また2002年7月には文部科学省の諮問機関である中央教育審議会から「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」(答申)が出された。

こうした近年の動きをみると、奉仕活動、ボランティア活動、体験活動が混同されながら、学校教育に導入されつつあるように思われる。これらの導入には問題はないのか、どのような課題があるのか、多方面から検討する必要がある。本論はその検討の一助にしたい。

まず、ボランティア活動が学校教育の中にどのように導入されようとしているのか、学習指導要領における記述を調べ考察する。次に、ボランティア活動経験者への聞き取り調査により、学校教育へのボランティア活動の導入にはどのような課題があるのか探っていきたい。

II 学習指導要領における「ボランティア活動」の記述

ここでは、小学校・中学校・高等学校の、1998・1999年告示の現行学習指導要領(以下「現行要領」と略称)と1989年告示の前学習指導要領(以下「前要領」と略称)との比較をし、「ボランティア活動」がどのように取り上げられているのかを調べる。記述のみられる箇所を抜粋し、それに対して考察していく。

1 前要領

小学校・中学校・高等学校いずれの前要領にも「ボランティア活動」という言葉はみられなかった¹⁾²⁾³⁾。

2 現行要領

(1) 小学校⁴⁾

・第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針

「2 学校における道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行なうものであり、……。道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」(下線著者。以下同じ)

→道徳を進めるに当たっては、ボランティア活

動や自然体験活動などの豊かな体験を通して道徳性の育成を図るように書かれている。前要領も、豊かな体験を通して道徳性の育成を図ることを記していたが、その体験の中身を具体的に、「ボランティア活動と自然体験活動など」と明示した。

・第1章 総則

第3 総合的な学習の時間の取り扱い

「5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) ボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。」

→今回の教育課程の改訂において、総合的な学習の時間が創設された。総合的な学習の時間の学習活動を行なうに当たっては、方法としては体験的学習と問題解決的学習を積極的に取り入れるように求めている。「自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学・調査、発表や討論、ものづくりや生産活動」などの学習活動を明示している。

・第3章 道徳

第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い

「3 道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (2) ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動を生かすなど多様な指導の工夫、魅力的な教材の開発や活用などを通して、児童の発達段階や特性を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。」

→ボランティア活動や自然体験活動などの体験学習などを生かした道徳教育を推進することとしている。

・第4章 特別活動

第2 内容

「D 学校行事

(5) 勤労生産・奉仕の行事

勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を涵養する体験が得られるような活動を行うこと。」

→内容の改善において、体験活動の一層の充実を図った。学校行事においては、特にボランティア活動などの社会奉仕の精神を涵養する体験や、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験などを充実することとした。

(2) 中学校⁹⁾

・第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針

「2 学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行なうものであり、……道徳教育を進めるに当たっては、教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が人間としての生き方について自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」

→道徳を進めるに当たっては、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して道徳性の育成を図るよう求めた。前要領も、豊かな体験を通して道徳性の育成を図ることとしていたが、現行要領では小学校同様、その体験の中身を具体的に「ボランティア活動や自然体験活動など」と明示した。

・第1章 総則

第4 総合的な学習の時間の取り扱い

「5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。

→総合的な学習の時間の学習活動を行なうに当たっては、体験的学習と問題解決的学習を積極的に取り入れるように求めている。中学校でも、小学校同様「自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学・調査、発表や討論、ものづくりや生産活動」などの学習活動を明示している。

・第3章 道徳

第3 指導計画の作成と内容の取り扱い

「3 道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(2) ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動を生かすなど多様な指導の工夫、魅力的な教材の開発や活用などを通して、生徒の発達段階や特性を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。」

→ボランティア活動や自然体験活動など体験活動を生かした道徳教育を推進することを重視している。

・第4章 特別活動

第2 内容

「A 学級活動

(2) 個人及び社会の一員としての在り方、健康や安全に関すること。

ア 青年期の不安や悩みとその解決、自己及び他者の個性の理解と尊重、社会の一員としての自覚と責任、男女相互の理解と協力、望ましい人間関係の確立、ボランティア活動の意義の理解など。

B 生徒会活動

生徒会活動においては、学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実や改善向上を図る活動、生徒の諸活動についての連絡調整に関する活動、学校行事への協力に関する活動、ボランティア活動などを行うこと。

C 学校行事

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得

し、職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。」

→「学級活動」においてボランティア活動の意義の理解を取りあげるとともに、「生徒会活動」「学校行事」においてはボランティア活動を促すなど、特別活動全体を通じてボランティア活動の充実を図ることとしている。

(3) 高等学校⁶⁾

・第1章 総則

第1款 教育課程編成の一般方針

「4 学校においては、地域や学校の実態に応じて、就業やボランティア活動に関わる体験的な学習の指導を適切に行なうようにし、勤労の尊さや創造することの喜びを体得させ、望ましい勤労観、職業観の育成や社会奉仕の精神の涵養に質するものとする。」

→高等学校学習指導要領「総則」の改善の1つに、「体験的な学習の指導」がある。それは、「地域や学校の実態等に応じて、就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導を適切に行なうこと」を示している。

・第1章 総則

第4款 総合的な学習の時間

「5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。

→小学校・中学校では「自然体験やボランティア活動などの社会体験、・・・」であったが、高校では「自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験、・・・」となり、「就労体験」が加わった。

・第2章 普通教育に関する各教科

第9節 家庭

「3 内容の取扱い

(1) 内容の構成及びその取り扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ウ 内容の(3)(高齢者の生活と福祉：著者注)については、学校や地域の実態等に応じて、学校家庭クラブ等との関連を図り、福祉施設等の見学やボランティア活動への参加をはじめ、身近な高齢者との交流の機会をもつよう努めること。

→普通教科では家庭科のみに「ボランティア活動」の記述がみられる。「高齢者の生活と福祉」の学習で、ボランティア活動への参加を促している。

・第4章 特別活動

第2 内容

「A ホームルーム活動

(2) 個人及び社会の一員としての在り方生き方、健康や安全に関すること。

ア 青年期の悩みや課題とその解決、自己及び他者の個性の理解と尊重、社会生活における役割の自覚と自己責任、男女相互の理解と協力、コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立、ボランティア活動の意義の理解、国際理解と国際交流など

B 生徒会活動

生徒会活動においては、学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実や改善向上を図る活動、生徒の諸活動についての連絡調整に関する活動、学校行事への協力に関する活動、ボランティア活動などを行うこと。

C 学校行事

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職業観の形成や進路の選択決定などに資する体験が得られるようにするとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。]

→「ホームルーム活動」において、ボランティア活動の意義の理解を取り上げるとともに、「生徒会活動」においてボランティア活動を行うことを促し、「学校行事」においてはボランティア活動など社会奉仕の精神を養う体験などを行うことが記述されている。

以上から、前要領にはみられなかった「ボランティア活動」ということばは、現行要領では、小学校・中学校・高等学校いずれにおいても頻出しており、文部科学省(国家)がボランティア活動を重視し、学校教育の中に位置付けようとしている積極的な意図がうかがえる。学習指導要領の中で「ボランティア活動」と明示されたことから、今後学校教育ではより積極的にボランティア活動が取り入れられていくことが予想される。

小学校と中学校では、総則(教育課程編成の一般方針、総合的な学習の時間)、道徳、特別活動の章に記述がみられ、高校では、総則(教育課程編成の一般方針、総合的な学習の時間)普通教育に関する各教科(家庭)、特別活動の章に記述がみられた。普通教科では高校の家庭科のみに記述がみられた。家庭科はこれまでも家族政策の1つとして利用されてきたことを考えると、福祉行政の肩代わりを家族や地域の相互扶助に期待しているあらわれと推察することもできる。

小・中学校現行要領では、ボランティア活動は「自然体験活動やボランティア活動などの体験活動…」のように自然体験活動とセットで取り上げられている。高等学校現行要領では、自然体験活動の他、就業も加えた3つのセットで取り上げられており、ボランティア活動を通して勤労観・職業観を育てようとしていると考えられる。

「自然体験活動」を行なう場合は、児童・生徒は全員一斉に学習活動の一環として行なうことも少なくないだろう。「ボランティア活動」と「自然体験活動」とがセットで取り上げられ

ることで、児童・生徒の「自主性に基づいて行なわれる活動である」ボランティア活動が自然体験活動と同様に強制される可能性も考えられる。

また、小学校・中学校・高校のいずれの現行要領においても、社会奉仕の精神を養う体験が得られる活動として「ボランティア活動」が取り上げられている。ボランティア活動は自主性に基づいて行われるべきものなので、「社会奉仕の精神を養う体験」とすることは矛盾する。本来は「奉仕活動」としたいところを、よいイメージで国民の抵抗の少ない「ボランティア活動」ということばに置き換えたのではないかと推察できる。

十分な議論や検討をせず、学習指導要領にあるように、学校教育にボランティア活動が導入されれば、実質的には、強制力をともなう奉仕活動が積極的に展開されることになり、子どもたちのボランティア活動に対する認識をゆがめる可能性があると考えられる。

Ⅲ ボランティア活動経験者への聞き取り調査

学校教育へのボランティア活動の導入にはどのような課題があるのか明らかにするため、以下のような調査を行った。

1 研究方法

(1) 調査対象者

現在ボランティア活動を行っている20代の大学生又は社会人13名を調査対象とした。21歳～25歳の男性4名、女性9名である。調査対象を20代の大学生又は社会人にしたのは、他の年代に比べて小学校・中学校・高校から現在までの期間が短く、当時のボランティア活動を振り返るのに適していると考えたからである。

(2) 調査時期と調査方法

2001年10月～12月。上記対象者に対し、面接による聞き取り調査を行なった。

(3) 調査内容

現在自分が行っているボランティア活動と、小学校・中学校・高校時のボランティア活動について、以下のことを中心に尋ねた。

- ・ボランティア活動を行うことは、今の自分の生き方や考え方にどのような影響を与えているか
- ・小学校・中学校・高校で行なったボランティア活動を振り返ってみて、その活動についてどのように思うか
- ・学校教育におけるボランティア活動や奉仕活動の、義務化や評価、活動内容についてどのように考えるか

2 調査対象者の属性

調査対象者A～Mの基本的属性である、年齢・性別・職業・現在までのボランティア期間・ボランティア活動内容は、以下のとおりである。

A：22歳・男性・大学4年生・9ヶ月・小学5、6年生対象の発明クラブ

B：22歳・女性・大学4年生・9ヶ月・小学5、6年生対象の科学教室

C：23歳・女性・大学4年生・4ヶ月・小学5、6年生対象の科学教室

D：21歳・女性・大学4年生・3年5ヶ月・小学5、6年生対象の発明クラブ

E：23歳・女性・大学4年生・3年8ヶ月・野外活動、障害者施設訪問等（YMCA所属）

F：25歳・女性・小学校講師・3年8ヶ月・小学5、6年生対象の科学教室、サイエンスシアター

G：22歳・女性・大学4年生・2年9ヶ月・小学5、6年生対象の科学教室、バザー、障害者施設

H：24歳・男性・大学4年生・約5年・野外活動、障害者施設訪問等（YMCA所属）、社会福祉施設

I：23歳・男性・大学4年生・9ヶ月・小学4年生～中学3年生対象の宇宙少年団

J：22歳・女性・大学4年生・3ヶ月・学童保

育(ボランティアサークル所属)

K:21歳・女性・大学3年生・1年9ヶ月・肢体不自由児施設、小学4年生～中学3年生対象の宇宙少年団

L:22歳・男性・大学4年生・3年9ヶ月・肢体不自由児施設

M:24歳・女性・大学院2年生・22年(家族で、里子を預かるボランティア活動に参加していたため)・家族で里子預かり、立山登山

3 結果と考察

聞き取り調査結果の中から、以下に示す(1)～(4)の4点に関連する記述を抜き出し、考察する⁷⁾。

(1) 児童・生徒は「ボランティア活動」と「奉仕活動」を混同して認識しているのではないか

A「(調査者＝…何がボランティアで何がボランティアじゃないかがわからなくなってくるよね。) そうそう。」

B「(調査者＝奉仕活動の義務化についてどう思いますか。) どう違うんですかね。」「最初はたぶんボランティアっていうと「してあげる。」っていう気持ちから入ると思うけど、私はそれでもいいかなって思う。そこから始まってやっぱりその活動には意味がないっていうことはない。」

C「子どもたちは奉仕活動とか募金とか清掃活動とかをすべてひっくるめてボランティア活動と思っているんじゃないかなと思います。…(私自身) そういうのを全部ひっくるめてボランティア活動って言うんだなって思っていました。」

D「(調査者＝小・中・高校生の時ボランティア活動をしたことはありますか。) 自分から進んでしようと思ったことはない。」

E「学校でグループで行ったみたいなのは、授業の一環でみたいのはあるけど、それ以外ではない気がする。…コシリハビリセンターで…1日…。(今の自分への影響) あんまりない気がする。」

F「(調査者＝ボランティアっていうイメージ

も一見あまりよくなくない?)でも、奉仕っていうよりはいいよね。それに騙されとる。同じこと言っとるがいね、日本やったら、ボランティア活動も奉仕活動も同じような…無償労働みたいな感じ。」

G「中学のときはボランティア・クラブだった。部長だったのよ。でも活動1回だけなんやけど。ちょうどクラブができたのが3年生の後半だったから、その時に入ってやっただけ。3年生の12月に病院のクリスマス会に行ったのが、最初で最後の部活。」

H「地域清掃とかあったよ。公園とか。学校でやるっていう活動だった。…このボランティアっていうのは自分からやるっていう意味?それとも学校で決められた活動っていうこと?」

I「高校の時、学校が斡旋しているボランティアを友達と…遊び感覚って言ったら変だけど何か『興味があるからやってみるか』ってことで友達と一緒にやりました。夏休みの『8月のこの日に海に行きます。だから一緒に行ってくれませんか?』っていうボランティア。そういうことを斡旋してる場があった。」

J「中学校で一斉清掃じゃないけど整頓清掃があった。…自分には何も影響はないです。町はきれいになるけど、自分には何も関係がない。」

「(調査者＝今学校の中でボランティア活動が取り上げられようとしています。) 今にはじまったことではないと思うし、実際奉仕活動として、ゴミ拾いとか除草作業とか…その学校の周り、地域で行うような活動はしているの、…」

K「中学校3年間を通して学年でボランティアに取り組んでいる…。…グループに分かれて1年間を通して行くのと、一斉の時も年1回くらい。」「高校の時遅刻したら、“ボランティア1個”とかあったけど。何かおかしいなっていうのは思うけど、でも何かやってみたら世界が広がりそう」

M「小学校のとき、…児童会で地域の皆で地区ごとにゴミ拾いに行ったり。学校全員で。」「中

学校の時に…掃除くらい。…それこそあまり自分には影響は与えていないかなって気はする。」

Iのように、ボランティア活動を奉仕活動と混同せずに、活動に参加をしている人もいたが、13人のほとんどは、自主的に活動に参加したのではなく、学校が行っている、あるいは教師から言われた、募金活動、清掃活動、地域清掃、整頓清掃のような学校で一斉に義務として行なう活動のことをボランティア活動であると認識しており、ボランティア活動と奉仕活動とを混同していた。

ボランティア推進校に通っていたKの高校ではボランティアを推進しているにもかかわらず、「遅刻したら、ボランティア1個」というように、罰としてボランティア活動が課されていた。部活動をしていない生徒に、ボランティア・クラブへの所属を強制している学校もあると聞いたことがある。このような取り上げ方では、生徒にボランティア活動についての誤った認識を与えることになる。

(2) 学校教育の中で「ボランティア活動」を取り入れる時、強制的な意味合いが含まれてしまう可能性があるのではないかと

B「1クラス1ボランティアっていうのが、掲げられてて、中学校の時。で、皆が1クラス1ボランティア・・・2ボランティアかな？全学年で草むしりをして、1クラスずつそれぞれしたいことにする。それで、私たちのクラスは老人ホーム訪問に行くというのをしました。…与えられたことをやるっていうか・・・そういう取り組みして活動をするんだなっていう感じでしたね。」「無理やり、私もボランティア活動をやったわけですよね。」「(その活動をしてよかったなと思ったことは)私の記憶によるとありません。いややったかな。」「ただ働きっていうイメージがついちゃったんじゃないかなって気がします。」

C「学校ではボランティア活動って言うんですけど結局強制になってしまうっていうこと

が多々見受けられるんで、その辺を考えながら子どもたちがもっと自主的にボランティア活動に参加できるような環境づくりっていうのが必要になってくると思う。教育実習に行ったときにも、ボランティア活動と称した募金活動があったんですけど、結局先生が呼びかけて『募金しなさい』っていう雰囲気になってたんで『ちょっと問題ありだな』って思いました。」

D「『強制的にやりましょう』っていうのは奉仕活動みたいになるのかな。ん、また少し違うか。…」

E「学校がボランティア活動を推進してるとやっぱり先生の評価とかいうのを意識してボランティアをする人がいる。」「ボランティアを始めるきっかけにはなり得るが、自分は実際授業の中でそういうのをやったが、それがそれから『面白い、やってみよう』って思うきっかけにはなっていない。」

H「(一斉清掃に行って感じたこと・よかったことは)ないな。なかった。そういうようなこと思わんとやとるやんね、小・中学生だと」

K「中学校3年間を通して学年でボランティアに取り組んでいる…。」「高校の時も遅刻したら、「ボランティア1個」とかあったけど。何かおかしいなっていうのは思うけど、でも何かやってみたら世界が広がりそう」

M「強制とかじゃなくて1つのイベントだった。」

現在20代の対象者たちが、小学校・中学校・高校を振り返ったとき、学校では「1クラス1ボランティア」や募金や清掃などが強制されて行われていたことを思い出していた。また、対象者は「学校が推進する＝評価」と考えていた。強制という形で行なわなくても、学校・教師側が評価するということがわかれば、生徒は「自主的にする」というのではなく、「評価のためにボランティアをする」ことになり、評価のあるボランティア活動には強制的な意味合いが含まれているといえる。「強制されたボランティア活動」はB ((2)) やE ((1)(2))、H ((2))、J

(1)、M ((1)) のように、自分へのプラスの影響は少なく、意味を見出していない場合が少なくない。

(3) 学校教育の中での「ボランティア活動」を評点化することは、自発性を損ない「評価・入試のためのボランティア」という意識を固着させるのではないか

B「…何人か行ってた気もしますね(内申点のために)」

C「きちんとした指導がされていないとやっぱり成績をよくしようと思ってボランティア活動に参加するという子がやっぱり増えてくると思います。」

D「私の高校の時みたいに『これをしたから、成績票に書いてやる。』とかそういう評価の仕方だったら、あんましよくない。」

E「学校がボランティア活動を推進しているとやっぱり先生の評価とかいうのを意識してボランティアをする人がいる。私としてはそれがすごくいや。」

G「ボランティアをすると内申書に『ボランティア活動をしていた』って書いてもらえるっていうのがあったから、みんな参加していたっていうのもあったと思う。たぶん『あれ(内申書)に書いてあげるから』って先生が言ったんやと思うがね。だからみんな来たんやと思う。」「私の高校の時みたいに『これをしたから、成績票に書いてやる』とかそういう評価の仕方だったら、あんましよくない。」

J「評価としては内申書の一部になるかもしれない。」

K「内申書に書くためにボランティアをしている人も結構いる。」

M「(調査者=話では、『ボランティア活動に参加しただけで内申書とか違ってくるぞ』とかいう…) そうそう、それでボランティア活動に参加している子が多かったね、そういえば。そういう噂は流れた。だから皆それに流されて参加していた気はする。」

以上から、多くの生徒は、内申書にボランテ

ィア活動の経験の有無が書かれ、ボランティア活動の評価が入試などの対象になっているとされている。すでに、ボランティア活動は「入試のための活動」という認識があり、評価されるためにボランティア活動を行っている実態もある。

(4) ボランティア活動は学校教育の中にどのように取り上げるのがよいか

A「何か社会体験活動とか社会学習みたいな…そういう形の方がいいんじゃないかなって思う。」「何か返ってくるものが必要だとすれば自分もボランティアをして向こうのしてもらった人たちに何かいろいろどうだったかな?っていうような意見ももらったりだとか、そうやってこう次につながるような仕方の方がいいかなって僕的には。」「学校でやるんだったらある程度の何種類かの選択肢を用意しておいた方が自分の好きな分野・興味のある分野っていうのが出来るんじゃないかな。」

B「『させる』ってことになっちゃまずいと思うんですね。子どもたちが自分でやりたいなって思える環境がくれたらいいなって思うんですけど。」

C「こういう活動をするぞって言って、たとえばいきなり先生が『来週老人ホームに行くぞ!』っていうのではなく、その前の指導として例えば地域のいろいろなボランティアの団体や個人でボランティアをされている方に、お話をさせていただいたり、学校に来ていただいてお話をさせていただくっていう活動や、またそういういろいろな本とか資料とかに書かれてあることもあると思うので、まず『ボランティア』ということばの意味をしっかりと把握させておくことが必要だと思いますし、そういうことをやってからじゃないと本格的なボランティア活動っていうのはやっぱり難しいんじゃないかなっていうふうに思います。」「義務っていうことになると『やらなくちゃいけないからやるんだ』っていう嫌々やるっていう意識が強くなってくると思うんですよ。…あまり義務義務っていうふ

うには言ってほしくないですよね。』

D「(奉仕活動)することによってたとえいやだと思えながらする人の中にも得るものがある」「1回ボランティアをやってみて『いいかも』とか『面白そうかも』って思うのもいい。学校としては、ボランティアをしたい生徒を中心として活動できる機会とかを与えてあげたい。」「よいところは評価してあげたいと思う。…でも『内申書のために』ということになると、それだけのためにやるんだったら自分には何も得るものはないと思うし、相手の人とかにも失礼だと思う。」

E「(奉仕活動の義務化について) ボランティアを始めるきっかけにはなりうるけども、私的には自分が授業でそういうのをやった(受けた)でしょ。それがそれから『おもしろい、やってみよう』って思うきっかけにはなっていないね。奉仕活動は、まあ経験としてやってみるのはいいかもね、くらい。」

F「学校教育の中でできるのは斡旋とか、ただ『ボランティアがあるよ』っていう情報提供をすればいいかな。学校がするのはどうかなって思うんね。でも学校が媒体にならないとだめなら、ボランティアセンターみたいところが学校に資料を出してくれて、それを子どもたちに見せるってことができるかな。」「学校であまり評価して『ボランティア活動をするすとすてきやね』っていうのやったら、してあげるになるがいね。それはまずいかな。」「評価する必要は学校では全くなくて、いいとか悪いとかを学校側がいうっていうのは、学校と全く別の切り離された世界じゃないかなって思う。」「ボランティアはね、やりたいって思うのとやってほしいっていう思いがあるっていうか、…強制したらだめ。だって苦痛になるもん。」

G「(ボランティア活動が学校教育の中で取り入れられようとしていることについて) 賛成。なんかね、しなさいって言われて行うのはボランティアじゃないやんね。自分からやるんだしたら、やってほしいと思う。それがきっかけと

なって、いろいろできるようになると思う。」

H「(ボランティア活動の評価に) 反対です。…子ども自身…いろいろな価値観をもっていいと思う。それを何か決められた価値観で評価するっていうのは、その価値観による価値観とか、…その考え方やバイによっていうのを先生が教科のように判断するんでしょう?…それに対して先生が評価するっていうことは、人間的な関係としてはおかしいんじゃないかなって思う。」

I「『ボランティア活動をやれー。』っていうのはおかしいと思う。接する機会を与える、学校側は紹介とかが大切だと思うよ。ボランティア活動を義務化する必要はないと思う。ボランティア活動を学校の教育の一環で取り入れるって必要はないと思う。課外活動っていうか…紹介は必要やけど。」「ボランティアに行くことによって施設で働いている人とかと・・・就業体験になるんじゃないかな」「自分がこういう職業に就くこととか決めてなくて、こういう施設に行った経験を通して、自分もこういうふうにするために尽くすことをやってみたいな一とか、何かきっかけにはなると思う。」

J「学校の活動として行うとするならばちゃんと授業として、そんな訳のわからんことじゃなくて、ちゃんと授業として位置づけて、…社会の中で自分がどういう役割を果たせるかということ課題にしてそれを達成したかどうかを評価して、そういうふうにかリキュラムに組み込むというのが大切。」「自分で課題を見出していく活動になればいい」「ボランティアの活動もどのような影響があって、どういう影響を及ぼしたので次はどうしたらよいかっていうのを振り返ってってという活動がないと学習にはならない。例えばディスカッションとか…」

k「(調査者=小・中・高校生のボランティア活動としてはどんな活動がいいと思いますか) 掃除…老人ホーム…」

L「ボランティア活動だけを取り上げるっていうのはどうかと思う。課外活動全般にあたって、

それぞれ興味があることが違うから、ボランティア活動だけがよいものとして取り扱うことは、押し売りっていうか、ボランティアはいいものだって押しつけている。」「小・中・高校でやるんだったらそんなに定期的に行うっていうよりは1回2回いろいろなことを1回ずつくらいやってみて、後はやりたいことをやっていけばいいんじゃないかな。」「介護体験とかってすごい見せかけのような感じがして、…だから何のためにこの介護体験を行かせているのかということと考えたら、もっと普通に必修科目の中に障害児について学ぶ機会を設けたほうがいいんじゃないかなって思います。』

M「選択の枠とかいっぱいつくってあげたらよい。」「私は個人でするのが好きだから、みんなでするのはどうかなー。」「自分が中学生だったら『こういうのがある』っていう情報はいっぱいほしい。」「強制とか学校で皆でっていうのはやっぱりよくないんじゃないかな。』

以上から、対象者はボランティア活動や奉仕活動における「体験」には価値を見出していた。しかし、授業の一環として一斉に強制的に行ったり、評価の対象にするのではなく、学校はあくまでも、子どもたちの自主性に基づいて、興味・関心・能力の可能性を探るための「紹介」や「選択肢を用意」する立場であるべきだと考えている人が多かった。

IV まとめと課題

現在ボランティア活動を行っている20代の大学生や社会人13名を対象に、聞き取り調査を行った結果、対象者の小学校・中学校・高校のボランティア活動の振り返りから、既に学校の中でボランティア活動が行なわれていることがわかった。しかし、それは児童・生徒の自主性に基づいたボランティア活動ではなく、募金活動、清掃活動、除草作業などの強制的な意味が含まれた活動であり、「ボランティア活動」と「奉仕活動」が混同されていた。「強制されたボラ

ンティア活動”を行った人たちは、その経験の意味や自分へのプラスの影響を認識できていなかった。

また、学校・教師側が意図しているかどうかにかかわらず、生徒はボランティア活動を入試や評価の対象として認識しており、評価のためにボランティア活動を行う生徒の実態も明らかとなった。

一方、多くの対象者が、ボランティア活動に体験としての教育的な価値や意味を見出していたが、学校教育の一環として参加を義務付けることや、評価することに対しては反対の立場をとっていた。

本稿で述べたように、小・中学校では2002年度から実施されている、また高校では2003年度から実施される、現行学習指導要領では、小学校・中学校・高等学校いずれにおいても、初めて「ボランティア活動」が明示され頻出している。文部科学省は学校教育におけるボランティア活動を重視しており、今後学校教育の中でボランティア活動はこれまで以上に組み込まれていくことが予想される。

記述内容をみると、小学校・中学校・高校のいずれの現行要領においても、社会奉仕の精神を養う体験が得られる活動として「ボランティア活動」が取り上げられている。ボランティア活動は自主性に基づいて行われるべきものであるので、「社会奉仕の精神を養う体験」とすることは矛盾する。道徳や総合的な学習、特別活動、家庭科において記述がみられることから、自主的・自立的な参加ではなく、全員一斉強制学習になることも推察される。本来は「奉仕活動」としたいところを、よいイメージで国民の抵抗感の少ない「ボランティア活動」ということばにソフト化して置き換え、「奉仕活動」を進めようとしている意図が感じられる。

学校教育への積極的なボランティア活動の導入は、新自由主義の「小さな政府」「少福祉」「自助努力」「自己責任」路線の一部とみることができる。

奉仕活動とボランティア活動はよく混同されるが、ボランティア活動は主体的な意味を認めた人の自発的・主体的な行為であるのに対し、奉仕活動は、活動をする本人が活動に意味を見出すかいなにかかわらず、他人のためになる活動を強制的に行なわされる行為である。またボランティア活動は社会の問題や構造的な問題、人権問題などを問うことにつながるのに対し、奉仕活動はそれらを考える余地を与えない。

したがって、「ボランティア活動」という名の「奉仕活動」の強制は、一人ひとりが自由で主体的な意思のもとに、市民活動・NPO活動へ参加し、連帯・協同し、社会を変革し創造していく力を削いでしまうことになるだろう。

中央教育審議会報告では、ボランティア活動が評価の対象となる可能性が記されているが、ボランティア活動を評価することは、ボランティアの精神を育てることに反している。

子どもたちは、これまで以上に常に評価されるおとなの目に晒されながら、心を閉ざし本当の自分を出せずに、周囲に適応することを強いられるだろう。意識的・無意識的に「いい子」であろうとし、苦しみ、時には自己や他者への破壊に向かうのではないだろうか。

以上のように、学校教育へのボランティア活

動の導入には、さまざまな問題が含まれており、学校や社会で議論や検討をせずにボランティア活動が導入されれば、真の意味でのボランティア活動ではなく、ボランティア活動という名の強制力をともなう奉仕的な活動になったり、評価の対象にされたり、社会を変革する市民の育成を阻んだりするなどの可能性が大きいと考えられる。

注および引用文献

- 1) 文部省、小学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1989
- 2) 文部省、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1989
- 3) 文部省、高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1989
- 4) 文部省、小学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1998
- 5) 文部省、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1998
- 6) 大蔵省印刷局、高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1999
- 7) 詳しい聞き取り調査内容は「海内千里『ボランティア活動の意義と課題』平成13年度金沢大学教育学部卒業研究論文」を参照されたい。